

巻頭言

「携帯電話の記憶」

理事長 新谷 友良

空いている地下鉄の車両で、座っている40人ぐらいの人を見まわすと、ものの見事にほとんどの人が携帯端末の画面を見ている。電車の席に座ると新聞を読む、本を読むなどは昔日の光景となってしまいました。

わたしが携帯電話を使い始めたのは21世紀に入る少し手前、20年ぐらい前と記憶しています。その頃はっきりと聴力が落ちていましたので、会社から支給された「デジタル・ムーバ」の音は聞こえず、携帯電話はほとんど用をなしませんでした。それで、かばんに入れっぱなしが多かったのですが、「iモードでメールの送受信ができるよ!」と教えられ、一気に携帯利用に飛び込んだ記憶があります。メール利用は会社にて、机に座って、パソコンに向かって、と思い込んでいたのが、出先で携帯を使ってメールできることは画期的な出来事でした。

その後、携帯電話は携帯端末に進化して、考えや思いをいつでも、どこでも、だれとでも自由に伝え合うことが可能になりました。そして、携帯端末は「アクセシブルな機器」の象徴になりました。私たちは聞こえないので、この恩恵をずい分大きく享受していますが、遠からずして文字入力をしなくても、端末に話しかけると文字になり、相手の話し声も文字で表示され、外国語の音声も翻訳して文字化される時代が来ます。

いま、「夜中に起きてメール、朝起きてメール、電車を待つ間・乗っている間もメール」といった状態がいろいろなところで問題になっています。先日、毎日新聞で「常に情報を受け続ける人は、バスを待つ間にぼーっとするような内省の時間がほとんどない。常にオンラインでつながって刺激を受けるのに忙しく、自分自身の深い感情と向き合うことがなくなっていく気がする」という記事を読みました。

「いつでも、どこでも、だれとでも」会話の出来る携帯端末が、「いつでも、どこでも、だれとでも」理解・共感できる会話を保証するものではないことは非常に大切なポイントと思います。ただ、携帯による電話が普及していくときにも同じような状況があったはずで、文字による会話（メール）が「内省の時間」をなくしてしまう決定的な違いは、1対1の会話ではなく複数対複数の会話が同時に可能になったからでしょうか? もっと考えてみたい問題と思っています。